第6回　子どもの心を知って保育を創るⅠ（0 歳児）
～　甘え泣き･怒り泣き･ぐずり泣き･･･あきらめ～

講師　　岡村　由紀子　氏

はじめに

0 歳児にどのようなイメージを持っていますか。発達が大きい、成長が早い、月齢の差が大きい、食の変化が大きい。日々の成長が大きいことは、親が子どもの成長を喜ぶ材料であり、親との共感を呼ぶ姿です。0 歳児の 1 年は大人の 10 年分と言われています。もう一つの特徴は、愛情をいっぱい受けているということです。見ているだけでかわいい 0 歳児は、教育力、親力、保育力をあげてくれる存在です。これを 5 つの項目にわけて話していきます。

1　体の発達

0 歳児は自我の土台期といい（第 2 回参照）、手が口に入ることで、自分の体を認知していきます。この 1 年間に、寝返り、ハイハイ（腹がつくベタ這い、膝がつく四つ這い、おしりが上がる高這い）、お座り、つかまり立ち、歩行ができるようになり、行動の主人公になっていきます。

新生児の哺乳、排泄、めざめの繰り返しは共鳴動作、共感する、身体で感じていく力ですが、この共感能力という言葉は、この後の人生のキーワードとなります。

『「サル化」する人間社会』（山極寿一　著）の中で「人間の特徴は家族とコミュニケーションの 2 つの集団に属して、その中で人間になってきた。それが今、家族が孤立化したり、地域のつながりが切れたり、子どもが育つ環境が崩壊したりしてきた」と言っています。共感能力が発達したことで、人間の子どもは他の類人猿にはない、憧れるという能力を持つようになりました。将来あんな大人になりたいという気持ちを持って、人間の子ども達は成長します。共感を培う、コミュニケーションを基盤とする場が今どこにあるかというと、幼稚園や保育所の遊びの中です。共感する能力が、新生児期から落ちてきていると言われています。赤ちゃんが泣いたらあやすという行為に、スマートフォンを取り入れるのは、「オンリーワンの私の心をわかる」という共感とは違っています。赤ちゃんが刺激によって泣き止んだり、見つめたりしているだけなのです。

じっと見るということが、次の首のすわり（3 か月）につながります。首がすわることで気道が確保され、発声の準備に入ります。5 か月位から、グライダーポーズ（腹ばいで手足を浮かせる）が見られます。それがやがて回転し矛先を変え、ハイハイへとつながっていきます。寝返って（5、6 か月）、自分で座れる（7 か月）ようになると、手が自由になり、細かいものを掴むようになります（7、8 か月）。初めは掌で掴み、段々指で掴むようになります。親指と人さし指がしっかりと向かい合って使える時期から、指さしが始まります。

「7 か月で投げ座り」という言葉もあります。支えがあって座るのは受動的であり、自分から座っているのではありません。求めるのは能動的座位です。寝返りは、左右両方に打てることが大事です。足の先を使って、蹴って寝返りをすることと、体の下に入り込んでしまった腕を自分で抜き出せることが大事な視点です。その出した手を前にして、横回転のピポットターンから移動につながっていきます。最初は腕の力の方が強いので、腕を突っ張り、後ろに下がってしまいます。そのあと前に出て、つま先

で蹴るハイハイ（8、9か月）、腕の力がつき体をグッと支える四つ這いになります（9、10か月）。高這いは両手、両つま先をしっかり上げて前に出ることができます。ハイハイで全身の筋肉を使って移動する時期に十分な豊かさを持っていないと、足腰が育たず転びやすい、歩くと疲れる、山道でハアハア息が切れるなどがみられます。

そして立って、初めの一歩が出ます。初めはハイガード歩行（両腕を上げてバランスをとる）で、普通の歩行まではまだ少しかかります。大事なことは、つかまり立ちから移動するのではなく、四つ這いで体をしっかり上げ、自分の力で中心軸を持って立ってから一歩が出ることです。ここをどういう風に環境を作っていくかは、保育者にかかっています。

幼児期に入って、よくこぼす、折り紙をきれいに折れない、ボタンの掛け外しができない子が気になります。人間しかできない尖指対向という持ち方ができないと、花摘みができません。乳幼児期に手先をよく使い、どういう動きをするかが大事です。子どもの意欲を引き出し、体の発達を促すのがプロです。発達には縦と横があり、縦は歩行する、しゃべるなどの目安であり、横は歩くということを使って、様々な経験をすること、豊かさの発達です。保育の中にどれだけ豊かさを持って体を作っていくか、環境を作っていくかが問われています。

２　心の発達

言葉に出さなくても、大人の気持ちが、よくわかっています。言葉を持っていないということは、五感で感じる力が高いということです。泣くことで人を呼び寄せる力がある時代です。声をかけるとじっと見たり、笑ったりするようになり、生理的な微笑みから、社会的微笑みになります。3か月～6か月頃は、快と不快だけだった感情が、不快の感情が分化していき、怒り泣き、甘え泣きが出てきます。喜びの快の感情が分化してくるのは、0歳児後半くらいです。1歳半くらいに向かって、人間の感情の土台は育ち、嫉妬心も1歳過ぎ位で育ってきます。泣き声で知らせる子どもの心がわかると、すごくかわいく思える親の心理があります。逆に泣いている理由がわからないとイライラしてしまいます。

①指さし（コミュニケーションのはじまり）…大好きな人がいること、伝えたいことがあること。この2つの条件が重なった時に、指さしがあります。

②人見知り・8か月不安…知っているもの、知らないものをはっきり見極め不安になるが、安全基地を支えに乗り越えられます。特定の人＝この人がいいというのと、そうではないという二つの世界の認知の発達（2分的世界）です。これがやがて2歳児位の比較する力になっていきます。大事なのは、安全基地を土台にして新しい人と結びつこうという意欲です。人見知りをしているからと言って、ずっと特定の人だけ関わるのではなく、『あなたを愛しているよ』という気持ちを伝えて、愛着のネットワークを広げていくことです。この新しい環境に向かっていくことが不安な子は、人を避けて物に行ってしまうのです。自閉症スペクトラムの子の中に、指さしや人見知りがあまり見られないのは、そういうこととも重なっています。

③象徴機能の芽生え…目の前に無いものを頭に描く力のはじまりは、離乳食を食べている時によく見られます。偶然落ちたスプーンの落ちた先を覗いてみて、次に自分で落としてみるようになります。子どもが今何に関心があるのかを考え、それにあった環境を用意し、発達の原動力を活かしてあげられることが大切です。

３　言葉の発達

言葉の発達のベースは、伝えたい人や伝えたい事柄があることです。

発達主体…まず泣く、産声を上げるから始まります。ぐずり泣きと特定の人の結びつき（2か月）、

まなざしの主人公で自分から微笑む（3、4 か月）、子どもの目の先に憧れの生活（大好きな人がいて、笑ってくれる）があり、機嫌が良いと喃語を発したり、大人の声掛けに反応したりします。鳩の鳴き声のようなクーイングが出たら、喃語が出ます。赤ちゃんから声を出して呼んだり、いないいないばあを喜んだりします（6 か月）。大人のイントネーションに反応、特に面白い言い方にキャッキャと笑います（7 か月）。おめめは？に答える、親しい人と「どうぞ」、「たーた」のようなやり取りをします(9、10 か月)。そして身近な、目の前にあるものが材料になる、初語と言われるもの(パパ、ママ、ワンワンなど)が出ます。ジャルゴンという、音を作るのは十分でないが、抑揚があり意味のある言葉に類似し、やがて言葉になっていくものがあります。これは喃語とは違い、初語のようにはっきりはしないけれどもわかるものです。

言葉の獲得には二つの条件が必要です。一つは出来事の知識（食事の時の挨拶）…こういう動きの時にこの言葉を使うという知識です。もう一つは、事物の知識（スプーンは口に入れる）です。二つが重なった時に言葉が生まれます。つまり、生活の中で具体的に見ているものを通して生まれてきます。言われている事をよく聞き取っています。子どもの前では大人レベルの話はすべきではないと思います。

言葉だけでなく、表情も含めて全て自分の思いや考えを伝える手段です。赤ちゃんの時から共感的に受け止めていくと、人間関係が深まり、意欲が育ちます。子どもの動きや泣き声を判別し、言葉にしていくことや、不適切な行為にも意味があるとわかって育てていくことが保育者としての専門性です。

4　生活

個人差が大きく、変化が大きいので、親の心配に対して、安心できる魔法の言葉をたくさんかけてあげられる保育者でいてほしいと思います。

①離乳食から幼児食…乳児は認識が感性感覚の時代です。自分のやっていることに言葉を添えてもらうことを繰り返し、意味が伴います。幼稚園・保育所は、人の関係性を使って一緒に育ち合っていくことも含め、人間関係を育てていくところです。人の真似をしようとする意欲は、表に出てこなくても、子どもの心は育っています。やってみたい環境を用意する。それが生活の中にある。その行動に言葉を添える。それが教育的な働きかけです。

手づかみで食べることはまさしく意欲です。目と手の共用で物を掴み、それを口に入れる。これは当たり前ではなく、見て学び、何度もやって失敗をし、できるようになるのです。これを汚したくないという理由でやらせないことは、発達の意欲を削いでいます。

②眠り…0 歳児は突然死症候群があるので、睡眠中も気を付けます。

③排泄…保育園でちょっとだけ先のことができる子が目の前にいることは、やってみたいという憧れ、手本になります。一対一の親子の関わりと違って、先生を含めて教育的な環境を作り、憧れる力を使って保育をしています。

④健康・薄着で育つ…新陳代謝が高いので、薄着で過ごします。そのわりに体温の変動に弱いので、発熱時にはこまめに対応します。チョッキや靴下が有効です。面倒でも、調節ができる衣服でその都度対応し、防衛体力、基礎体力を上げていきます。

5　保育

①探索活動…身の回りの物を遊びの対象としながら、それを目で追って、手で触り、音に耳をすますといった遊びです。子どもの身の回りにあるものが全て興味・関心の対象であり、おもちゃとなります。手を伸ばして触りたい、ハイハイでそこに行きたいと思う所におもちゃを置きます。それを触っている姿を見て、ご機嫌だ、で済ませるのではなく、それ

を使って、遊びのモデルとなる動きをして見せ、次の遊びの動きに変化を持たせます。“気に入っている”の先をどのようにするかは、保育者が一緒に関わって遊ぶ中での工夫です。

②感覚遊び…自分の体の感覚。一対一でわらべうたをやったり、くすぐったりします。0～2 か月は見る・聞く力が大きく発達していきます。0 歳児には本物のおもちゃを、と思っています。本物のオルゴール、木のぬくもり、いろいろな素材の布などです。

首がすわる頃は、手がおもちゃです。目と手が連動してくると目の前に出したおもちゃに手を伸ばします。そこに保育者が一緒に楽しむことで遊びになります。あやしてもらい一緒に遊んでもらうことで、能動的に物に関わる遊びに向かう力が育ちます。結局、いっぱい贈り物をもらうというのが 0 歳児の時代であり、いっぱい愛情を注ぎこんで関わって、微笑みを贈って共感していくということです。

おもちゃとは、子どもの遊びを誘う意図で作られたものです。その子どもの年齢、発達、興味によって違う内的要求に合わせ、感性を育てるために、今ある発達に合わせたおもちゃを手作りすることもできます。

③絵本…言葉やうた、動きを誘い、さらに人の関わりを媒介できます。子どもの反応に合わせてめくるから、読む時、読む人によって、読む時間が変わるのです。制作者の意図で作られた映像(テレビ・ビデオ)の一方通行とは違います。

④模倣遊び…やがてごっこ遊びにつながっていきます。まね遊びは、働きかけていかないと出てきません。見通し、予測がつき、間が生まれるのを待てるようになり楽しめます。

いたずらは探究心の表れです。不適切な行動の中に、子どもの今願っている発達の意欲が隠れています。それが実現できるような保育環境を作っていくことが大切です。

⑤戸外遊び…自然は向こうから働きかけてくれる偉大なる玩具です。生活リズムを育てるためにも、五感を鍛えます。

6　指導

指導の原点は、赤ちゃんとしてではなく、一人の人間として見ていくことです。大人の都合に合わせるのではなく、子どもの意欲を尊重した働きかけをします。指導の中心は、24 時間で捉え、環境を作り、人と安心感を育てていきます。

①全ての指導は遊びと基本的生活習慣の中にあります。ベースは意欲です。

②働きかけ構造は、環境を作ることです。人的環境（保育者）と物的環境です。

③言葉をかけることで、体感と知覚情報が合致します。行動の前に「〇〇しようね」等の言葉を添えることで、意欲を引き出します。

人と響き合う能力は、向かい合って抱く＝生まれてすぐ見つめ合うことから始まります。一見無意味のような動きもお母さんや保育者の語りかけには反応しています。人の声には敏感で、周波数でいうと大人の声より子どもの声の方が入りやすく、また人間の声は深く、機械音は浅く入るといいます。

おわりに

遊び込む力が学ぶ力となり、やがて学力につながっていくと言われています。それは 0 歳児から始まっているのです。意欲的に遊ぶという経験が、学ぶ力につながっていきます。ここをわかって保育していくことが専門性だと思います。

赤ちゃんの心が読め、お互いの気持ちが通い合わせられた時、自分の保育力も上がり、保育も楽しいと感じると思います。子どもの心がわかり、子どものことで語り合える職場づくりをして互いに学び合うこと。それが保育者として保育を永く続けていけるコツではないでしょうか。

第 6 回 保育者資質向上研修会
平成 28 年 10 月 12 日
会場：焼津市総合福祉会館ウェルシップ